



潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」

第Ⅵ期（2023 年 10 月～2024 年 9 月）成果報告書

研究課題（和文）： パフォーミングアーツにおけるエンパシー：能楽、前衛、ロボット演劇

研究課題（英文）： Empathy in the Performing Arts: Nô Theatre, Avant-garde, Robot Theatre

申請者名・所属先： 土肥秀行 大学院人文社会系研究科

海外招聘者名： Matteo Casari マッテオ・カザーリ（ボローニャ大学芸術学部准教授）

1. 研究の目的

研究課題にあるとおり、共同研究パートナーであるマッテオ・カザーリ氏の専門である「能楽」、土肥の専門である「前衛芸術」（具体的には未来派の演劇と文学）、カザーリ氏が近年関心を寄せる「ロボット演劇」の 3 ジャンルを、「情動面」にフォーカスして比較する、というのが本共同研究の目的である。

2. 研究開始当初の背景

初の「ロボットもの」といわれるチャペックの演劇『ロボット』（1920）に先立つこと 11 年、イタリアの未来派のリーダーであるマリネッティは、やはり演劇形式の『電気人形』（仏語、1909）を発表し、機械を演劇にもちこむことに極めて前衛らしさをみていた。神原泰の訳（『電気人形』、1924）により、日本でも同時代的な反響が得られている。未来派はまた、すでに能楽の斬新さに注目し、新しい象徴演劇としてヨーロッパで能の創作を試みていたパウンドやイエイツにも大きな示唆を与えている。こうした歴史的な文脈が背景に、いま「ロボット演劇」（実際にロボットを用いる）における非肉体性と、舞台上での感情のゆれに注目すると、日本の伝統形式と最新のテクノロジー応用舞台が同じ地平にあると気付く。翻って能楽とは、ヨーロッパでは、時代と土地を越えた「普遍性」あるものとして、前衛芸術の美学（超人的、機械的、現代の語では“ポストヒューマン”に通じる）との近似でもって受容されてきたことを再認識する。カザーリ氏は、勤務するボローニャ大学芸術学部に拠点をおく研究会を運営している。Performing robots: interdisciplinary research group（学際的研究グループ“ロボットを演じる”）との名の通り、多分野・学際的というだけでなく、異なる文化的背景をもつ演劇形態を研究対象とする。カザーリ氏は、東京大学において、自身の研究グループの活動を積極的に紹介し、共同研究の輪の拡充を意図している。

3. 研究の方法

カザーリ氏との共同研究を、①オンライン講演会（計 2 回）、②実地調査（東京、佐渡、淡路）を通して進める。講演会は、美学者の吉田寛氏をディスカッサンとして迎え、第一回を「ロボット能序説—ボローニャ大学芸術学科ラボでの実験を交えて」、第二回を「ロボット能におけるエンパシー、日本での調査をふまえて」と題し、一般も対象としたアウトプットの機会とする。またカザーリ氏来日（2024/5/20-6/20）に合わせ、様々な活動を共同で行う。大阪大学石黒教授ラボ・元研究員・カ石武信氏インタビュー、能楽師・勝海登氏インタビュー、演出家・平田オリザ氏インタビュー、能楽師・梅若猶彦氏インタビュー、日立ロボット製作者・網野梓氏インタビュー、さらには佐渡調査と淡路調査を予定している。



4. 研究成果

今回の共同研究を通して得た豊富な材料を活かし、2025 年 9 月に予定される AISTUGIA（伊日学会）の定期大会（於ナポリ東洋大学）にエントリーし、共同で発表を行い、続いて大会論集に共著論考を伊語で発表予定である。その内容は、人間／非人間と演劇的效果の関連性について理論的・経験的に考察し、ロボット演劇の今後についてうらなうものとなるであろう。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

〔雑誌論文〕

〔学会発表〕

〔その他〕

6. 招聘フェロー（海外招聘者）からのコメント

潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」の枠組で、招聘フェローとして、2024 年 5 月 20 日から 6 月 20 日まで日本で過ごした研究期間は、演劇とロボット工学の關係に特化した私の研究にとって非常に有益なものとなりました。支給いただいた研究費と関係スタッフの支援により、密度の高い研究計画にもとづき、様々な活動に従事できました。演劇研究者、演出家、ロボット工学士との数多くのインタビューを実行し、さまざまな演劇体験を経験する機会に恵まれました。能楽、歌舞伎、文楽などの古典ジャンルの観劇体験を重ねられたのも大きな収穫です。また、東京から地方への出張も二度経験しました。能舞台や人形劇が広く普及し、ロボットやからくり人形を展示するたいへん興味深い施設「佐渡歴史伝説館」が存する佐渡島、さらには独自の浄瑠璃文化が発展した淡路島を訪れることができました。研究期間に得られた知見は、すでに国際会議への参加に活用されており、論文投稿（2025 年）と単著（2026 年）に盛り込まれる予定です。